

金沢大学人間社会研究域附属

古代文明・文化資源学 研究センター

要覧 2021





目次

ごあいさつ	3
概要	4
運営組織	5
研究組織	5
専任・兼任教員の研究概要	7
外部研究資金採択情報	19
研究成果の公開	21
諸規程	22



ごあいさつ

人間社会研究域附属 古代文明・文化資源学研究センターは、前身である国際文化資源学研究センターの活動や成果を引き継ぎ、金沢大学の強みの一つである考古学・文化資源学の研究を格段に進化させるため、令和3年4月1日に設立されました。このセンターは、学際研究による古代文明の世界的な研究拠点となることをめざし、

- (1) 世界各地の古代文明の中心地と周縁で世界をリードする発掘調査や考古学研究を展開し、古代文明の研究を通して人類史の解明に寄与する。
- (2) 革新的な文理融合研究により、世界各地の古代文明の起源の解明や、発展と衰退のメカニズムの解明に寄与する。
- (3) 研究成果を学術分野にとどめることなく広く社会に広め、SDGsの達成に貢献する。

という3つの目標を掲げています。

センターの構成員は、エジプト、西アジア、南アジア、中央アジア、中国、そしてマヤと世界各地の考古学調査の最前線で活躍し、大規模な発掘調査や国際共同研究を各地で推進しています。それらの考古学研究は、パレオゲノミクス、宇宙線物理学、構造力学など医系・理系の研究と融合することにより革新的な文理融合研究となり、古代文明の研究を大きく発展させることが期待されています。

また、センターではこういった学術成果を単に学界のみにとどめるのではなく、国際文化資源学研究センターが培ってきた文化資源学のアプローチにより、現代社会の諸問題の解決と結び付け、現代社会の要請であるSDGsの達成に貢献できるような古代文明研究を目指します。どうぞ、皆さまのご支援をよろしくお願いいたします。

古代文明・文化資源学研究センター長

中村 誠一



概要

【古代文明・文化資源学研究センター設立の経緯と背景】

人間社会研究域附属 古代文明・文化資源学研究センターは、前身である国際文化資源学研究センター（以下「旧センター」）の形態文化資源部門を中心として成り立っています。旧センターは、有形・無形の文化遺産を新たな文化と付加価値を創造するための「文化資源」ととらえ、国内外においてその総合的・多角的な研究と保護・活用法の開発をすることを目的として設置され、令和3年3月31日まで存続しました。旧センターの形態文化資源部門の構成員は、10年の設置期間に大型の科学研究費補助金や内外の関連省庁から獲得した外部研究資金を使用して、研究活動を大きく進展させるとともに、旧センター構成員がメンバーである新学術創成研究機構の「文化遺産国際協力ネットワークユニット」と共同で、2度にわたり学内の競争的研究資金である「超然プロジェクト」に採用され大きな研究成果を挙げてきました。

旧センターは、その最終評価において、本学のさらなる研究力強化のため、令和2年度末をもって発展的に廃止する旨の学長裁定が下され、旧センターの三部門のうち10年間に突出した研究成果を示してきた形態文化資源部門を中心として新たな全学研究所の設立を目指すという方向性が示されました。その結果、これまでの研究をより先鋭化し発展させるため、センター構成員が実施中の超然プロジェクト「古代文明の学際研究の世界的拠点形成」（2019~2021年度）の目的に沿った形で、古代文明・文化資源学研究センターが人間社会研究域の中に設置され、近い将来の全学研究所化に向けた準備が開始されることになった次第です。

【本研究センター設置の目的】

金沢大学の強みの一つである考古学・文化資源学の研究を格段に進化させるため、以下の3つの目的をもって本研究センターを設置します。

- (1) 世界各地の古代文明の中心地と周縁で世界をリードする発掘調査を展開し、古代文明の研究を通して人類史の解明に寄与する。
- (2) 革新的文理融合研究により、世界各地の古代文明の起源解明、発展と衰退のメカニズムの解明に寄与する。
- (3) 研究成果を学術分野にとどめることなく広く社会に広め、SDGsの達成に貢献する。



運営組織

運営会議

村井 淳志	人間社会研究域長	河合 望	新学術創成研究機構教授
新田 哲夫	人間社会環境研究科長	中村 誠一	古代文明・文化資源学研究センター長
入江 浩司	歴史言語文化学系長	足立 拓朗	資料館長／埋蔵文化財調査センター長

外部評価委員

關 雄二	国立民族学博物館人類文明誌研究部教授、副館長
常木 晃	筑波大学名誉教授

研究組織 (2021年10月1日現在)

センター長 中村 誠一

考古学部門

部門長 足立 拓朗

専任教員 足立 拓朗 (古代文明・文化資源学研究センター 教授)
藤井 純夫 (古代文明・文化資源学研究センター 特任教授)
上杉 彰紀 (古代文明・文化資源学研究センター 特任准教授)
久米 正吾 (古代文明・文化資源学研究センター 特任助教)

兼任教員 河合 望 (新学術創成研究機構 教授)
小高 敬寛 (国際基幹教育院 准教授)

客員教授 小嶋 芳孝 (金沢学院大学 名誉教授)
小柳 美樹
秦 小麗 (復旦大学 科技考古研究院 教授)

客員准教授 徳永 里砂 (アラブイスラーム学院 研究員)

客員研究員 肥後 時尚 (日本学術振興会特別研究員 PD)
山口 雄治 (岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 助教)
山崎世理愛 (日本学術振興会特別研究員 PD)
山藤 正敏 (奈良文化財研究所都城発掘調査部 研究員)



和田浩一郎（国際文化財株式会社／NPO法人文化遺産の世界）

Garcia Fernandez, Maria Gudelia（香川大学 講師）

Gregg M. Jamison（ウイスコンシン大学ミルウォーキー校 准教授）

考古科学部門

部門長 覚張 隆史

専任教員 佐々木由香（古代文明・文化資源学研究センター 特任准教授）

覚張 隆史（古代文明・文化資源学研究センター 助教）

兼任教員 中村 慎一（歴史言語文化学系 教授／新学術創成研究機構長）

佐藤 丈寛（医薬保健研究域 助教）

客員教授 内山 純蔵（イーストアングリア大学セインズベリー日本藝術研究所 研究員）

客員研究員 阿部 善也（東京電機大学 助教）

飯塚 義之（中央研究院地球科学研究所 研究技師／岡山大学文明動態学研究所 外国人客員研究員）

石谷 孔司（国立研究開発法人産業技術総合研究所 研究員）

板橋 悠（筑波大学 助教）

菊地 大樹（総合研究大学院大学先導科学研究科 特別研究員）

北川 千織（名古屋大学大学院人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター
共同研究員／ベルリン自由大学エジプト学セミナーメンバー）

中込 滋樹（ダブリン大学トリニティカレッジ 助教）

Pankaj Goyal（デカン大学大学院・研究所）

文化資源学部門

部門長 谷川 竜一

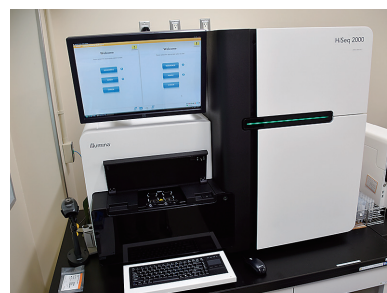
専任教員 中村 誠一（古代文明・文化資源学研究センター 教授／センター長）

兼任教員 谷川 竜一（新学術創成研究機構 准教授）

客員准教授 石村 智（東京文化財研究所 無形文化遺産部 音声映像記録研究室長）

市川 彰（日本学術振興会海外特別研究員：コロラド大学ボルダー校／名古屋大学大学院
人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター 共同研究員）

村野 正景（京都文化博物館 学芸員）



専任・兼任教員の研究概要

【考古学部門】

足立 拓朗 (あだち たくろう)

(所属：古代文明・文化資源学研究センター 教授、専門：西アジア考古学)

<研究内容>

西アジアの新石器時代から鉄器時代にかけての遊牧民・移牧民を研究対象としており、以下の研究を進めています。

新石器時代においては、移牧民の貝製品交易の研究を行っています。地中海産貝と紅海産貝の貝製品の分析から、貝製品の双方向の連鎖交換システムを明らかにすることが目的です。

銅器時代においては、スプーン形土製品の研究を行っています。従来、村落遺跡から出土していましたが、金沢大学が調査している砂漠地域の祭祀遺跡で出土しており、その新たな機能に注目して研究を進めています。先史時代におけるスプーンは、離乳食の摂取のために使用されたとする仮説を立てており、世界各地の先史時代のスプーン遺物との比較も行なっていきたいと考えています。

青銅器時代においては、武器研究を進めています。現在は特に槍の研究を進めていますが、今後は棍棒の研究にも取り組んでいく予定です。アラビア半島の青銅製武器の編年を構築することが目的です。

鉄器時代においては、イラン系遊牧民の起源について研究を行なっています。これまでは土器の型式学的研究を進めてきましたが、今後は文化財科学の手法を取り入れた研究を実施していく計画です。

<主な著書・論文>

- ・ Adachi, T. (2019.2), A Chronological Division of the Iron Age III Period at the Tappe Jalaliye in Giran, Northern Iran. In *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in honour of Sumio Fujii*, edited by S. Nakamura, T. Adachi and M. Abe, pp.319-322, Rokuichi Shobou, Tokyo.
- ・ Adachi, T. and S. Fujii (2018.4), Shell Ornaments from the Bishri Cairn Fields: New Insights into the Middle Bronze Age Trade Network in Central Syria. In *Proceedings of the 10th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East*, pp.239-246, Harrassowitz Verlag.
- ・ Adachi, T and S. Fujii (2018.3), Wadi Hedaja 1 and 2: A Chronological Assessment Based on Unearthed Artifacts. *al-Rafidan* 39: 55-69.
- ・ 足立拓朗 (2017.11) 「古代イランにおける青銅器から鉄器への変遷」『文明と鉄器－普及とその過程－』愛媛大学東アジア古代鉄器文化センター。
- ・ Adachi, T. (2016), Shell Ornament Processing Methods in Northern Syria during the Early and Middle Bronze Ages. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 35: 1-14.



藤井 純夫 (ふじい すみお)

(所属：古代文明・文化資源学研究センター 特任教授、専門：西アジア考古学)

<研究内容>

「肥沃な三日月弧」外側の大乾燥地で、先史遊牧民遺跡の調査を続けています。調査の目的は、(先史時代の末から現代に至るまで一貫して中東社会を特徴付けている) 遊牧部族の形成過程を明らかにすることにあります。中東社会の最も内奥に潜む、中東社会ならではの史的特質。それを探りあてたいというのが、私の研究の学術的「問い」です。

主な調査区は、ヨルダン南東部のジャフル盆地 (1995~) とサウジアラビア北西部のタブーク高原 (2012~) です。一時はシリア中部のビシュリ山系 (2007~2011) でも調査していましたが、現在は中断しています。年代的には、「肥沃な三日月弧」外側の乾燥地に家畜ヤギ・ヒツジが初めて導入された先土器新石器時代Bから、本格的な部族社会が成立したとされる前期青銅器時代までの、約5000年間を対象です。そのため、先土器新石器時代の移牧出先集落から、後期新石器時代の屋外祭祀施設、銅器時代の半農半牧集落、前期青銅器時代遊牧家族のキャンプ址など、様々な遺跡を発掘してきました。

約30年に及ぶ調査を振り返って思うのですが、沙漠の中には沢山の歴史や文化が埋もれています。定住域の大都市遺跡だけが人類の文化遺産ではありません。長い道程、酷暑、砂嵐、水の補給、安全の確保、その他諸々辛いことばかりですが、発見の喜びはそれをはるかに上回ります。これからも沙漠の調査を続けていきたいと思えます。

<主な著書・論文>

- ・ Fujii, S. (2020), Late Neolithic cultural landscape in the al-Jafr Basin, southern Jordan: A brief review in context. *Studies in Ancient Art and Civilization* 24: 13-32.
- ・ Fujii, S. (2020), Pastoral nomadization in the Neolithic Near East: Review from the Viewpoint of social resilience. In *Resilience and Human History: Multidisciplinary Approaches and Challenges for a Sustainable Future*, edited by Y. Nara and T. Inamura, pp.65-83, Springer, Singapore.
- ・ Fujii, S., T. Adachi, and K. Nagaya (2019), Harrat Juhayra 202: an Early PPNB flint assemblage in the Jafr Basin southern Jordan. In *Near Eastern Lithic Technologies on the move; Interactions and contexts in Neolithic Traditions*, edited by L. Astruc et al., pp.185-197, Astrom Editions, Nicosia.
- ・ Fujii, S. (2018), Bridging the enclosure and the tower tomb: new insights from the Wadi al-Sharma sites, north-west Arabia. *Proceedings of Seminar for Arabian Studies* 48: 83-98.
- ・ 藤井純夫 (2018) 「食料生産革命とレジリエンス」 奈良由美子・稲村哲也編著『レジリエンスの諸相』NHK出版、pp.95-110。





上杉 彰紀 (うえすぎ あきのり)

(所属：古代文明・文化資源学研究センター 特任准教授、専門：南アジア考古学)

<研究内容>

インド、パキスタンを中心とする南アジア考古学を専門としています。南アジアはその多様な自然環境に応じて、多様性と統一性を特徴とする社会と文化を築いてきました。この南アジアの特質について多面的に理解するため、西暦紀元前4000年頃から紀元後1000年頃までの5千年間に及ぶ長期的な時間スケールと多層的な空間スケールのもとで、南アジア各地に展開した社会、文化を物質文化の面から研究しています。

具体的には、前2600～前1900年頃に南アジア北西部にさかえたインダス文明、前1500～後1000年頃の北インドと南インドにおける鉄器時代・古代の文化について、それらが南アジアという一つの文化的世界の形成においてどのような役割を果たしたのか、人、物、情報の移動を含めた地域間交流という視点から解明を試みています。また、南アジア各地の研究者と共同で発掘調査や分布調査を行うとともに、各地の考古資料の記録化・分析を継続することにより、資料に即した実証的研究を進めています。また、南アジアの歴史の上で重要な役割を果たしたバハレーンでも調査・研究を行なっています。

この多様性と統一性を特徴とする南アジアの考古学研究は、古代文明社会の成り立ちや衰退、変容における地域社会のあり方や地域間交流の役割の理解に重要な手がかりを与えてくれるものと考えています。

<主な著書・論文>

- ・ Uesugi, A. (2020), Stone Beads from Taxila. *Ancient Pakistan* 30: 1-22.
- ・ Uesugi, A., Ambily C.S., Ajit Kumar, Rajesh S.V. and Abhayan G.S. (2019), A Study on the Ceramic Sequence in the Megalithic Culture of Kerala. *Man and Environment* 44(1): 21-32.
- ・ Uesugi, A., Ambily C.S., Ajit Kumar, Abhayan G.S. and Rajesh S.V. (2019), Stone Beads from Megalithic Burial at Niramakulam, Kerala. In *Human and Heritage: An Archaeological Spectrum of Asiatic Countries (Felicitation to Professor Ajit Kumar)*, edited by Rajesh S.V., Abhayan G.S., P. Nayar and E.R. Ilahi, pp. 1-22, New Bharatiya Book Corporation, Delhi.
- ・ Uesugi, A. (2019), A Note on the Interregional Interactions between the Indus Civilization and the Arabian Peninsula during the Third Millennium BCE. In *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in honour of Sumio Fujii*, edited by S. Nakamura, T. Adachi and M. Abe, pp. 337-355, Rokuichi Shobo, Tokyo.
- ・ Uesugi, A. (ed.) (2018), *Current Research on Indus Archaeology*. Research Group for South Asian Archaeology, Archaeological Research Institute, Kansai University, Osaka.





久米 正吾 (くめ しょうご)

(所属：古代文明・文化資源学研究中心 特任助教、専門：中央アジア考古学)

<研究内容>

現在、中央アジアに位置するキルギスとウズベキスタンの山岳・山麓地帯の遺跡で発掘調査をおこなっています。5000年前頃の青銅器時代に農耕牧畜文化が西アジアと中国から波及し、中央アジアの山岳・山麓地帯に食料生産経済が初めて成立した背景とその歴史的意義について、環境への適応、文化交流あるいは人の移動の観点から調べています。この調査研究をとおして、遊牧国家という中央ユーラシア地域を歴史的に特徴づける政治組織の基層形成について理解を深めたいと考えています。

中央アジアで発掘調査をおこなう前は、シリアやヨルダン、アゼルバイジャンなど西アジア・コーカサス地域での発掘調査に参加し、新石器時代から青銅器時代にかけての先史・古代社会における集団の階層化や社会の複雑化あるいは農耕牧畜の開始と波及に関する研究に取り組んでいました。また、アフガニスタンや中央アジア諸国を中心とした文化遺産保護国際協力事業の企画運営等にも携わってきました。

こうした経験を踏まえ、当センターに所属する新旧両大陸の様々な地域を専門とする考古学研究者や近年の考古学研究において目覚ましい発展を遂げる自然科学分析を専門とする自然科学系研究者との連携をとおして、新石器時代以降のユーラシア大陸各地に生まれた農耕牧畜社会の発展過程の多様なあり方について理解を深めたいと考えています。また、海外考古学調査の持続可能な発展に向けて、調査をおこなうキルギスやウズベキスタン等での文化遺産の保護と活用に向けた実践的な取り組みも模索しています。

<主な著書・論文>

- ・久米正吾、アイダ・アブディカノワ (2021) 「キルギス、天山山中の移牧民遺跡の考古学調査 2」 今村薫編『遊牧と定住化』(中央アジア牧畜社会研究叢書 2)、名古屋学院大学現代社会学部文化人類学研究室、pp.93-102。
- ・Kume, S., Y. Miyata and S. Kadowaki (2017), Feasting with the dead on the Euphrates: Stable isotope analysis of carbonized residues on Early Bronze Age ceramics from the cemetery near Tell Ghanem al'Ali. *Al-Rafidan* 38 (*Special Volume: Papers in honor of Professor Katsuhiko Ohnuma on the occasion of his 70th birthday*): 95-100.
- ・Kume, S. and A. Sultan (2014), Burials, nomads, and cities: A perspective to changing nomad-sedentary relations on the Syrian Middle Euphrates during the third and second millennium BC. In *Settlement Dynamics and Human-Landscape Interaction in the Dry Steppes of Syria*, edited by D. Morandi Boncossi, pp.137-150, Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.
- ・Kume, S. (2013), Gypsum plaster manufacturing in northeast Syria: An ethnographic case study. In *Neolithic archaeology in the Khabur Valley, Upper Mesopotamia and beyond*, edited by Y. Nishiaki, K. Kashima and M. Verhoeven, pp.80-95, ex oriente, Berlin.
- ・Numoto, H. and S. Kume (2010), Survey and sondage at the cemeteries near the site of Tell Ghanem al'Ali. In *Al-Rafidan special issue (Formation of tribal communities: Integrated research in the Middle Euphrates, Syria)*, edited by K.Ohnuma et al., pp. 49-60. The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University, Tokyo.



河合 望 (かわい のぞむ)

(所属：新学術創成研究機構 教授、専門：エジプト学、考古学)

<研究内容>

古代エジプト新王国時代の歴史、文化について考古学と文献史学の双方から研究しています。具体的には新王国時代第18王朝の所謂「アマルナ革命」の後のツタンカーメン王の時代を含むポスト・アマルナ時代の歴史と文化です。これまでテーベやサッカラなどの遺跡で新王国時代の墓の発掘調査に参加してきました。最近では、JICA（国際協力機構）の大エジプト博物館保存修復プロジェクトの一環としてツタンカーメン王のチャリオット（二輪馬車）の研究を行っています。また、これまで精力的に調査が実施されてきたテーベ遺跡の新王国時代の墓地に比べて調査が不十分であったサッカラ遺跡における新王国時代の墓地の調査を試み、2016年から調査を実施していますが、2019年にサッカラ遺跡で初のローマ支配時代のカタコンベ（地下集団埋葬墓）を発見しました。これを受け、ローマ支配時代における埋葬習慣や来世観についても新たな研究テーマとして取り組んでおります。今後は当初目的としていた新王国時代を中心とするサッカラ遺跡の王朝時代の墓地の調査も計画しております。

<主な著書・論文>

- ・河合望 (2021) 『古代エジプト全史』 雄山閣。
- ・前田耕作、河合望、馬場匡浩、長谷川修一、西山伸一、安倍雅史、上杉彰紀、西藤清秀、山内和也、清岡央 (2021) 『オリエント古代の探究：日本人研究者が行く最前線』 中央公論新社。
- ・河合望、谷川竜一編 (2021) 『成熟社会の文化遺産とは何か－多様性と持続可能性を作り出すために－』 (『金沢大学文化資源学研究』 26)、金沢大学国際文化資源学研究センター。
- ・Kondo, Jiro and Nozomu Kawai (2021), Japan. In *A History of World Egyptology*, edited by Andrew Bednarski, Aidan Dodson, and Salima Ikram, pp. 439-447, Cambridge University Press, Cambridge.
- ・Kawai, Nozomu (2020), Exploring the New Kingdom Tombs at North Saqqara: A Brief Report on the Archaeological Survey from 2016 to 2017. *Saqqara Newsletter* 18: 1-15.
- ・Kawai, Nozomu, Yasushi Okada, Takeshi Oishi, Masataka Kagesawa, Akiko Nishisaka and Hussein Kamal (2020), The Ceremonial Canopied Chariot of Tutankhamun (JE61990 and JE60705): A Tentative Virtual Reconstruction. *CIPEG Journal: Ancient Egyptian & Sudanese Collections and Museums* 4: 1-11.





小高 敬寛 (おだか たかひろ)

(所属：国際基幹教育院 准教授、専門：西アジア考古学)

<研究内容>

1996年よりシリアでのフィールドワークを通じて西アジアの先史考古学に携わり、近年はトルコ、アゼルバイジャン、ヨルダン、イラン、サウジアラビアでの遺跡調査にも参加してきました。そして、現在はイラク・クルディスタンを中心に活動しています。これらの国ぐにの領土を含む西アジアが果たしてきた人類史上の先駆的役割は広く知られていますが、特に研究の標的としているのは、農耕牧畜社会の成立から都市文明社会に至るまでの文化変化のプロセス、そしてその波及によって生み出された古代オリエントともいうべき歴史的世界の成り立ちの解明です。

具体的には、土器資料の研究を基盤に、生態環境や生業経済、ヒトの移動性との関連を注視しながら、物質文化の時空間的枠組みについて精細かつ重層的に把握することを進めています。その方策として、関連諸分野を専門とする研究者たちの協力を得て「ザグロス山麓先史考古学プロジェクト (The Zagros Piedmont Prehistoric Project)」を主宰し、イラク・クルディスタン南東部、シャフリゾール平原に所在するシャカル・テペ遺跡およびシャイフ・マリフ遺跡の調査を行なうとともに、国内外に所蔵されているイラク北部の諸遺跡から出土した考古資料の分析にも取り組んでいます。

こうした活動を通じて、人類最古の文明であるメソポタミア文明がおよそ5000年前に誕生した経緯を実証的に跡づけ、世界各地の古代文明を比較研究するうえでの基軸を提供できればと考えています。

<主な著書・論文>

- ・ Odaka, T., O. Maeda, K. Shimogama, Y. S. Hayakawa, Y. Nishiaki, N. A. Mohammed and K. Rasheed (2020), Late Neolithic in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: New Excavations at Shakar Tepe, 2019. *Neo-Lithics* 20: 53-57.
- ・ Odaka, T., O. Nieuwenhuys and S. Mühl (2019), From the 7th to the 6th Millennium BC in Iraqi Kurdistan: A Local Ceramic Horizon in the Shahrizor Plain. *Paléorient* 45(2): 67-83.
- ・ Odaka, T. (2019), Neolithic Potsherds from Matarrah, Northern Iraq: The Collection of the University Museum, the University of Tokyo. In *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in Honour of Sumio Fujii*, edited by S. Nakamura, T. Adachi and M. Abe, pp.251-260, Rokuichi Syobou, Tokyo.
- ・ Odaka, T. (2018), Neolithic Pottery with Horizontal Applied Bands from Tell el-Kerkh, the Rouj Basin. In *II Workshop on Late Neolithic Ceramics in Ancient Mesopotamia: Pottery in Context*, edited by A. Gómez Bach, J. Becker and M. Molist, pp. 25-34, Museu d'Arqueologia de Catalunya, Barcelona.
- ・ Odaka, T. (2017), Decoration of Neolithic Pottery in the Northern Levant: A View from the Rouj Basin. In *Painting Pots – Painting People. Investigating Decorated Ceramics of the Late Neolithic Near East*, edited by W. Cruells, I. Mateiciucová and O. Nieuwenhuys, pp. 177-185, Oxbow Books, Oxford.

【考古学科学部門】

佐々木 由香（ささき ゆか）

（所属：古代文明・文化資源学研究センター 特任准教授、専門：植物考古学、環境考古学）

<研究内容>

人間は周囲の植物資源をどのように選択して利用し、また改変してきたのかという人間と植物の関係史を研究テーマとしています。森林資源に恵まれた日本列島では、縄文時代以降、森林資源から食料を得ていただけでなく、それらを利用して、構築物や、木製品、編組製品、漆製品などを製作してきました。さらに、約8000年前以降の居住空間の周りでは、資源をより利用しやすくするために人間が関与した植生を作っていたことが一部の地域では明らかになりつつあります。

こうした人と植物の関わり史を研究するためには、考古学的に遺構・遺物を検討して時空間的に位置付けるだけでなく、自然科学分析の成果を用いて植物遺体自体や周辺自然环境を明らかにし、考古遺物の年代と一緒に議論する必要があります。そのために、主に種子・果実や葉などの大型植物遺体の分析や、樹種同定、レプリカ法による土器圧痕分析、土器付着炭化植物遺体の分析を自ら実践し、人間が資源として利用した植物遺体を検討してきました。

また博物館や埋蔵文化財調査機関などと連携した共同研究で当時の技術知を解明するために、自然科学分析で明らかにした素材や植物の知識と、民俗調査で得られた知識を合わせて、実験や製品を復元する作業を行なっています。ニワトコなどの現生種実を用いた実験を通して過去の植物資源利用の新たな側面を見いだしたり、編みかごなどの製作を通じて遺物の観察だけではわからない技術の様相を発見したりしています。センターでは、所属されている様々な時代・地域の考古学研究者や自然科学研究者、地元の埋蔵文化財に携わる研究者と連携して、新たなフィールドも見つけていきたいと考えています。

<主な著書・論文>

- ・佐々木由香（2021）「七社神社前遺跡出土土器の種実圧痕からみた縄文時代前期の植物利用」『北区飛鳥山博物館研究報』23: 3-12。
- ・Noshiro, S., Y. Sasaki and Y. Murakami (2021), *Importance of Quercus gilva* (イチイガシ) for the prehistoric periods in western Japan. *Japanese Journal of Archaeology* 8(2): 133-156.
- ・佐々木由香（2020）「植物資源利用からみた縄文文化の多様性」『縄文文化と学際研究のいま』（季刊考古学別冊31）、pp.69-84。
- ・佐々木由香（2019）「土器種実圧痕から見た日本における考古植物学の展開」庄田慎矢編『アフロユーラシアの考古植物学』クバプロ、pp.180-194。
- ・Sasaki, Y. and S. Noshiro (2018), Did a cooling event in the middle to late Jomon periods induce change in the use of plant resources in Japan?. *Quaternary International* 471: 369-384.





覚張 隆史 (がくはり たかし)

(所属：古代文明・文化資源学研究中心 助教、専門：考古分子生物学、文化財科学、馬学)

<研究内容>

2006年から遺跡出土人骨・動物骨を対象にした分子遺伝学および同位体生態学研究に従事してきました。特に、歯エナメル質のハイドロキシアパタイトに含まれるストロンチウム (Sr) や酸素など多種元素同位体比測定による哺乳動物の出生地推定や食性復元をこれまで実施してきました。2016年には、藤原京造営期において利用されていた家畜馬が東日本内陸部から持ち込まれたことを示し、大宝律令に記されていたとされる遠隔地の牧から朝廷へ献上する貢馬制度が大宝律令以前まで遡る可能性を示しました。また、2017年に日本列島の縄文人骨 (伊川津貝塚) から世界で初めて全ゲノム配列を取得し、大陸集団との比較ゲノム解析によって縄文人の起源に関する新たな仮説を提示しました。現在では、遺跡出土骨から全DNA配列情報 (ゲノム情報) を取得する手法開発やその応用を実践しており、日本列島の縄文時代・弥生時代・古墳時代における人骨・動物骨 (馬・犬など) を対象に、それぞれの時代・地域のゲノム情報のデータベース化を進めています。同位体・ゲノム・形態の3つのデータを組み合わせることで、今まで提唱されてきた考古学における仮説検証に挑む新しい融合領域「考古科学“Archaeology by Science”」の創出を進めています。

世界の古代文明研究として、中国・韓国・ロシア・ホンジュラス・ヨルダン・サウジアラビア・エジプト・オマーン・モンゴル・キルギス・ウズベキスタン・ウクライナ・インド・イランなどで研究を展開しています。近年では同位体分析に基づいて中国南部の新石器時代における人の移民率の推定を実施し、新石器時代後期から女性が他地域から移入してくる現象 (嫁入り婚の可能性) を捉えました。また、マヤ文明のコパン遺跡出土人骨のゲノム解析を進めており、文明を形成した人々の血縁関係・婚姻システムの復元を試みています。

<主な著書・論文>

- ・ Gakuhari, Takashi, Shigeki Nakagome, Simon Rasmussen, Morten E. Allentoft, Takehiro Sato, 他23名 (2020), Ancient Jomon genome sequence analysis sheds light on migration patterns of early East Asian populations. *Communications Biology* 3(1).
- ・ McColl, Hugh, Fernando Racimo, Lasse Vinner, Fabrice Demeter, Takashi Gakuhari, 他61名 (2018), The prehistoric peopling of Southeast Asia. *Science* 361(6397): 88-92.
- ・ Gakuhari, Takashi, Hajime Komiya, Junmei Sawada, Tomoko Anezaki, Takao Sato, Kenichi Kobayashi, Shigeru Itoh, Koichi Kobayashi, Hiroyuki Matsuzaki, Kunio Yoshida and Minoru Yoneda (2015), Radiocarbon dating of one human and two dog burials from the Kamikuroiwa rock shelter site, Ehime Prefecture. *Anthropological Science* 123(2): 87-94.
- ・ Gakuhari, Takashi, Michiko Into, Takanori Nakano and Minoru Yoneda (2014), Strontium Isotope Analysis of Prehistoric Faunal Remains Excavated from Fais Island in Micronesia. *People and Culture in Oceania* 29: 69-81.



中村 慎一（なかむら しんいち）

（所属：歴史言語文化学系 教授／新学術創成研究機構長、専門：東アジア考古学）

<研究内容>

大学院修了から今日に至るまで、①アジア稲作の起源と展開に関する研究、②中国における都市と国家の形成過程に関する研究、の二つのテーマを中心に研究を進めてきました。近年では、同位体地球化学、生化学、遺伝学等の方法を用いて考古遺物の分析を行ういわゆる考古科学の研究者たちと協働して、考古学プロパーの方法では解明することが難しかった事柄に取り組んでいます。


前科研（新学術領域研究《総合稲作文明学》H27-31）では、中国浙江省を中心とする地域を対象に、広範囲経済の一環として始まった稲作が、やがてそれなくしては立ちいかない社会を生み出し、最終的に良渚都市文明として結実する過程をさまざまな方面から跡付けていきました。

良渚文化期に発明された、ヒトとモノを集める装置としての都市のアイデアは、紀元前3千年紀後半に中国各地に広まり、いくつもの地方文明が勃興します。それらは紀元前1850年頃に黄河中流域の二里頭に収斂し、そこを唯一の放射中心とする中国文明が生まれます。現科研（学術変革領域研究（A）《中国文明起源》R2-6）では、そうした汎中国的な文化動態に加え、プロト・シルクロード経由でもたらされたウェスタン・インパクトが果たした役割なども視野に入れつつ、中国文明誕生の道筋を追っていきます。

<主な著書・論文>

- ・中村慎一、劉斌編（2020）『河姆渡と良渚－中国稲作文明の起源－』雄山閣。
- ・Shoda, S., A. Lucquin, C. Sou, Y. Nishida, G. Sun, H. Kitano, J. Son, S. Nakamura and O. E. Craig (2018), Molecular and isotopic evidence for the processing of starchy plants in Early Neolithic pottery from China. *Scientific Reports* 8 (17044): 1-9. (DOI:10.1038/s41598-018-35227-4)
- ・秦小麗、中村慎一（2018）「新石器時代後期の黄河流域における長江系玉器の拡散－山西省清涼寺墓地と陶寺墓地の分析を中心として－」『中国考古学』18、pp.53-71。
- ・秦小麗、中村慎一編（2018）『黄河流域におけるトルコ石製品の生産と流通』（『金沢大学文化資源学研究』19）、金沢大学国際文化資源学研究センター。
- ・Watanabe, N., S. Nakamura, B. Liu and N. Wang (2017) , Utilization of Structure from Motion for processing CORONA satellite images: Application to mapping and interpretation of archaeological features in Liangzhu Culture, China. *Archaeological Research in Asia* 11, 38-50. (DOI: 10.1016/j.ara.2017.06.001)





佐藤 丈寛 (さとう たけひろ)

(所属：医薬保健研究域 助教、専門：分子人類学)

<研究内容>

北東アジアを中心とした地域の古代人および現代人のゲノム多様性情報を用いてヒト集団の歴史を明らかにする研究に取り組んでいます。特に古代人のゲノム解析は、現在では消滅してしまった過去のヒト集団の遺伝情報を得ることができるため、人類の歴史を理解する上で非常に有用な研究手法であると考えています。現在は北海道礼文島のオホーツク文化期の遺跡やバイカル湖周辺地域の新石器時代～中世の遺跡から出土した古人骨のゲノム解析を行っています。

また、ゲノムワイド関連解析 (GWAS) という手法を用いてヒトの形態形質に関連する遺伝子多型の探索にも取り組んでいます。顔の形態、耳の形態、体毛の濃さ、皮膚の色といった軟部組織の表現型に関連する遺伝子多型が同定できれば、古代人の骨形態からは復元することができなかった特徴までもゲノム情報から復元できる可能性があります。さらに、特定の表現型に関連する多型周辺のゲノム領域の多様性を分析することで、その表現型が過去に自然選択を受けたかどうかを検証することもできます。

このような手法を組み合わせることで、北東アジア地域におけるヒト集団の移住・混血の過程や北東アジア人に特徴的な表現型が獲得されるに至った過程を明らかにしていきたいと考えています。

<主な著書・論文>

- ・ Sato, Takehiro, Noboru Adachi, Ryosuke Kimura, Kazuyoshi Hosomichi, Minoru Yoneda, Hiroki Oota, Atsushi Tajima, Atsushi Toyoda, Hideaki Kanzawa-Kiriyama, Hiromi Matsumae, Kae Koganebuchi, Kentaro K Shimizu, Ken-ichi Shinoda, Tsunehiko Hanihara, Andrzej Weber, Hirofumi Kato and Hajime Ishida (in press), Whole-genome sequencing of a 900-year-old human skeleton supports two past migration events from the Russian Far East to northern Japan. *Genome Biology and Evolution*. (DOI: 10.1093/gbe/evab192)
- ・ Nomura, Akihiro, Takehiro Sato, Hayato Tada, Takayuki Kannon, Kazuyoshi Hosomichi, Hiromasa Tsujiguchi, Hiroyuki Nakamura, Masayuki Takamura, Astushi Tajima and Masa-aki Kawashiri (in press), Polygenic risk score for low-density lipoprotein cholesterol and familial hypercholesterolemia. *Journal of Human Genetics*. (DOI: 10.1038/s10038-021-00929-7)
- ・ Sato, Takehiro, Shigeki Nakagome, Chiaki Watanabe, Kyoko Yamaguchi, Akira Kawaguchi, Kae Koganebuchi, Kuniaki Haneji, Tetsutaro Yamaguchi, Tsunehiko Hanihara, Ken Yamamoto, Hajime Ishida, Shuhei Mano, Ryosuke Kimura and Hiroki Oota (2014), Genome-Wide SNP Analysis Reveals Population Structure and Demographic History of the Ryukyu Islanders in the Southern Part of the Japanese Archipelago. *Molecular Biology and Evolution* 31: 2929-2940. (DOI: 10.1093/molbev/msu230)
- ・ Sato, Takehiro, Razhev Dmitry, Tetsuya Amano and Ryuichi Masuda (2011), Genetic features of ancient West Siberian people of the Middle Ages, revealed by mitochondrial DNA haplogroup analysis. *Journal of Human Genetics* 56: 602-608. (DOI: 10.1038/jhg.2011.68)



【文化資源学部門】

中村 誠一（なかむら せいいち）

（所属：古代文明・文化資源学研究センター センター長・教授、専門：マヤ文明研究・マヤ考古学・文化資源学）

<研究内容>


私の専門は、古典期（紀元250～900年頃）と呼ばれる最盛期マヤ文明の研究です。古典期のマヤ文明社会は、旧大陸の古代文明のように政治的に統一されることがなく、現在のメキシコ南部からホンジュラスの西部にかけて60から70の王国が存在したと言われていました。それらの痕跡は、各地に古代都市遺跡として残されていますが、初めて現地へ渡ってから38年にわたる研究歴のうち、後半の22年間は世界遺産登録されている遺跡を中心に調査研究して来ました。現在はホンジュラスのコパンのマヤ遺跡（1980年文化遺産登録）とグアテマラのティカル国立公園（1979年複合遺産登録）で調査研究を行っています。

コパンでの調査研究は、宇宙線ミュオンを使った王墓の探索やコパン王の一人と思われる埋葬の同位体分析やゲノム解析を始め、先端的な文理融合研究を行って王朝史の解明を目指しています。1980年代後半から2000年代にかけて、碑文解説学、考古学、図像学、形質人類学、同位体化学による学際研究で確立された定説では、コパン王朝は西暦426/427年に、カラコル（ベリーズ）およびティカル（グアテマラ）と関係する外来王ヤシュ・クック・モという人物において創始され、この人物はペンシルバニア大学博物館調査隊が発見したフナルという建造物内石室墓の被葬者であると言われて来ました。欧米の研究者たちは、その定説に基づき、精緻なコパン王朝史を築きあげていますが、文理融合研究の成果とともに、自身がコパンにおける過去の発掘調査で収集して来た一次資料を使って、王朝創始時期の検証を行い、不明な部分の多い王朝史の前半部の歴史を明らかにしたいと考えています。

一方、グアテマラ・ティカル国立公園では、コパン王朝創始時期におけるティカル王朝の比較研究を行っていますが、現在、考古学的な発掘調査は一時休止しています。その分、JICAと連携しSDGs達成に向けた国際協力活動に注力しており、文化資源学的な実践研究を行っています。ティカル周辺の6つのコミュニティ住民を対象として、彼らが世界複合遺産という文化資源・自然資源を活用して、どのようにして自分たちの生活向上につなげていくか、コミュニティ住民や地元行政、カウンターパート政府機関と一緒にその方策を考え、導き出す研修活動を毎週オンラインで行っています。現在は、コロナ禍で中断していますが、2018年までは学生たちの海外インターンシッププログラムも行っていました。早くコロナ禍が収束して、ティカルやコパンで、再び、現地活動が再開できる日が来ることを願わずにはられません。

<主な著書・論文>

- ・中村誠一（2021）「マヤ文明コパン遺跡における古典期王権に関する諸問題」『北陸と世界の考古学：日本考古学協会金沢大会資料集』、pp.319-322。
- ・中村誠一（2021）『ラテンアメリカ文化事典』（共著/2-20「文化遺産の活用と地域社会」、17-5「日本人による古代アメリカの探求」を執筆）、丸善出版。
- ・中村誠一（2020）「中米における遺跡を活用した国際協力事業：グアテマラとホンジュラスの事例」『文化遺産とSDGs II－世界では、いま何が語られているのか－報告書』文化遺産国際協力コンソーシアム、pp.32-45。
- ・Suzuki, Shintaro, Seiichi Nakamura and Douglas Price (2020), Isotopic proveniencing at Classic Copan and in the southern periphery of the Maya Area: A new perspective on multi-ethnic society. *Journal of Anthropological Archaeology* 60: 1-17.
- ・Nakamura, Seiichi (2020), Proyecto Arqueológico Copán (PROARCO): Investigaciones Arqueológicas en los Grupos 9L-22 y 9L-23, Copán, Honduras, Vol.3（コパン考古学プロジェクトPROARCO：グループ9L-22, 9L-23における考古学調査(3)）。*Kanazawa Cultural Resource Studies* 25.（スペイン語と英語の2カ国語で執筆）



谷川 竜一（たにがわりゅういち）

（所属：新学術創成研究機構 准教授、専門：建築史）

<研究内容>

私は、20世紀のアジア近現代建築史を大きな専門枠として研究を進めてきました。建造物は近代化と植民地化を担う両義的なツールであり、それが故に衝突と融和、共存のメカニズムに関与します。より現場に即して言えば、多様な人々が関係しながら建造物が建設され、受容・利用され、更新されていく過程は、空間的なコミュニケーション史と見ることもできるでしょう。こうした視座から、「アジアにおける帝国日本の形成とその敗戦にともなう解体機軸の解明」の研究を、建築史・都市史・土木史を横断しつつ進めています。また、帝国日本の解体だけでなく、その解体された地にあらたに建設される新国家（韓国、北朝鮮など）のポストコロニアルな歴史も重要なテーマとしています。

特に力を入れている具体的テーマは次の三つです。

- 1) 日本との関係を視野に入れた朝鮮半島の20世紀建築・都市・土木史の解明
- 2) 日本によるアジア巨大開発史の解明——特に水力発電所やトンネル、超高層ビルやホテルなどで構成された日本のアジア開発と対アジア戦後賠償の史的解明
- 3) 出稼ぎトンネル坑夫集団・豊後土工の全容解明

<主な著書・論文>

- ・谷川竜一（2021）「日豊本線のトンネル建設工事と南・北海部郡の地域社会——豊後土工成立前夜の建設労働者たち」『土木史研究講演集』41、土木学会、pp.55-62。
- ・谷川竜一、クズネツォフ・ドミトリー（2021）「北朝鮮の都市計画家・金正熙——朝鮮戦争休戦（1953年）以前の履歴解明とその分析」『日本建築学会計画系論文集』86(781)、pp.1103-1113。
- ・谷川竜一（2021）「豊後土工と芋」『佐伯史談』237、佐伯史談会、pp.15-31。
- ・Ryuichi Tanigawa and Dongchun Seo (2020), Architecture teachers during the early days of North Korea: Between liberation from Japanese colonial rule and the establishment of a socialist state. *Japan Architectural Review* 4(1): 155-167, Architectural Institute of Japan.
- ・谷川竜一（2020）「1958年、平壤・青年通りにアパートが建つ」『思想』1161、pp.38-61。



外部研究資金採択情報 (2021年10月1日現在)

科学研究費補助金 (研究代表者になっている資金のみ)

学術変革領域研究(A)ー総括班

中村 慎一 中国文明起源解明の新・考古学イニシアティブ

学術変革領域研究(A)ー計画研究

覚張 隆史 パレオゲノミクス解析プラットフォーム開発とその応用
佐々木由香 土器に残る動植物痕跡の形態学的研究
中村 慎一 威信材の生産と流通

基盤研究(S)

藤井 純夫 中東部族社会の起源：アラビア半島先原史遊牧文化の包括的研究

基盤研究(A)

覚張 隆史 シン・パレオゲノミクスが創る博物館資料群活用の新展開
久米 正吾 原シルクロードの形成ー中央アジア山岳地帯の初期開発史に関する総合研究ー
中村 誠一 世界遺産「コパンのマヤ遺跡」における王朝創始時期とそのプロセスの解明

基盤研究(B)

足立 拓朗 西アジアにおける先史遊牧民の起源と乳製品利用
河合 望 エジプト、北サッカラ遺跡における新王国時代墓地の総合的調査研究
佐々木由香 土器敷物圧痕の素材植物と編組技法から見た縄文時代の技術知の解明
佐藤 丈寛 古代ゲノム解析による東アジアーシベリア境界領域における人類集団の変遷の解明
谷川 竜一 朝鮮半島の冷戦下都市復興における東西建設援助の建築史的研究

基盤研究(C)

小高 敬寛 メソポタミア初期農耕社会の再編期における物質文化の基礎的研究
佐々木由香 日韓新石器時代における鱗茎利用の時空間的変遷の解明

国際共同研究加速基金ー国際共同研究強化

谷川 竜一 冷戦下東アジアにおける都市の対立と依存に関する歴史研究ー平壤とソウルの空間変容史

国際共同研究加速基金ー国際共同研究強化(B)

中村 誠一 ミューオン透視法を使ってマヤ文明王墓の発見を目指す国際共同研究

新学術領域研究 (研究領域提案型) ー公募研究

足立 拓朗 西アジアの都市化と先史時代の遊牧民交易
小高 敬寛 都市化過程におけるメソポタミア外縁部の考古学的研究



その他の研究資金・委託事業資金（研究代表者になっている資金のみ）

- 上杉 彰紀 日本学術振興会 二国間交流事業（共同研究）：「アラビア内陸乾燥域・青銅器時代における都市形成と遊牧民社会の関係（相手国：オーストリアとの共同研究）」
- 中村 誠一 JICA草の根技術協力事業：「ティカル国立公園への観光回廊における人材育成と組織化支援プロジェクト」第2期
- 中村 誠一 文化庁 文化遺産国際協力拠点交流事業：「グアテマラ世界複合遺産ティカル国立公園における文化遺産の三次元計測と取得データの活用法に関する現地人材養成事業」

科学研究費補助金（研究機関を「金沢大学」として申請した客員教員・研究員の案件のみ）

基盤研究(C)

- 飯塚 義之 非破壊化学分析による石器石材の研究：先史時代の石材の変遷について
- 内山 純蔵 先史巨大噴火の生業への影響に関する動物考古学的研究
- 小嶋 芳孝 ロシア沿海地方における渤海（698～926年）遺跡出土遺物編年の基礎的研究
- 小柳 美樹 呉越における青銅製農耕具の実証的研究
- 徳永 里砂 初期イスラーム時代のグラフィティを用いたアラビア半島ヒジャーズ地方の道の研究
- 中込 滋樹 時空間的集団遺伝学モデリングによる現代日本人の進化史の解明
- 村野 正景 学校博物館の成長のためのパブリック考古学的研究：京都府を中心に

新学術領域研究（研究領域提案型）－公募研究

- 中込 滋樹 自然環境と文明の変遷に伴う選択圧の変動：古代・現代マヤの集団ゲノムモデリング

若手研究

- 肥後 時尚 古代エジプトの「二柱のマート」の実体解明－「死者の書」を手掛かりにして－

特別研究員奨励費

- 肥後 時尚 古代エジプトの葬祭文学研究－木棺資料への文献学・考古学的アプローチから－
- 山崎世理愛 古代エジプトにおける器物奉献儀礼の通時的展開過程の復元



研究成果の公開

シンポジウム・セミナー（共催含む）

- 2021年5月8日 「第1回渤海考古学シンポジウム」
(共催：金沢大学古代文明・文化資源学研究センター、超然プロジェクト)
- 2021年5月29日 特別セミナー「考古学・文化遺産のための3D計測：原理と応用」
(主催：金沢大学古代文明・文化資源学研究センター)
- 2021年6月5日 「中東部族社会の起源」シンポジウム『北レヴァントにおける青銅器時代遊牧民墓域の型式・構成・背景』
(主催：科学研究費補助金基盤研究（S）「中東部族社会の起源：アラビア半島先原史遊牧文化の包括的研究」、共催：金沢大学古代文明・文化資源学研究センター)
- 2021年6月27日 古代文明・文化資源学研究センター キックオフシンポジウム「古代文明の学際研究と文化資源学」
(主催：金沢大学古代文明・文化資源学研究センター、共催：新学術創成研究機構 文化遺産国際協力ネットワークユニット金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際研究の世界的拠点形成」、金沢大学資料館)
- 2021年9月4日 「中東部族社会の起源」第2回シンポジウム『南レヴァントおよび紅海周辺における青銅器時代遊牧民墓域の型式・構成・背景』
(主催：科学研究費補助金基盤研究（S）「中東部族社会の起源：アラビア半島先原史遊牧文化の包括的研究」、共催：金沢大学古代文明・文化資源学研究センター)



金沢大学人間社会研究域附属古代文明・文化資源学研究センター規程

(趣 旨)

第1条 この規程は、金沢大学学則（以下「学則」という。）第8条第3項の規定に基づき、金沢大学人間社会研究域附属古代文明・文化資源学研究センター（以下「センター」という。）に関し、必要な事項を定める。

(目 的)

第2条 金沢大学人間社会研究域（以下「研究域」という。）に、学則第8条第2項の規程に基づき、センターを置き、同センターは、研究域の附属研究施設として、世界の「古代文明」や「形態文化資源」に関する異分野融合研究・国際共同研究を通じて、金沢大学の研究力の向上や国際的知名度の向上に資し、広く国内外への情報発信及びSDGs達成に向けた貢献を行うことを目的とする。

(研究部門)

第3条 センターに次に掲げる研究部門を置く。

- (1) 考古学部門
- (2) 考古科学部門
- (3) 文化資源学部門

(職 員)

第4条 センターに次の職員を置く。

- (1) センター長
 - (2) センター教員（学内兼任教員及び特任教員を含む。）
- 2 前項の職員のほか、必要に応じ、客員研究員その他の職員を置くことができる。

(客員教授等)

第5条 センターに客員教授及び客員准教授を置くことができる。

(協力職員)

第6条 センターに、各研究部門の研究推進を支援させることを目的として協力教員及び協力研究員（以下「協力職員」という。）を置くことができる。

(センター長)

第7条 センター長は、センターに所属する専任又は兼任の教授をもって充てる。

- 2 センター長は、センターの活動を総括する。
- 3 センター長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

- 4 センター長が欠けたときの補欠のセンター長の任期は、前任者の残任期間とする。

(センター教員等の選考)

第8条 センター教員等の選考については、別に定める。

(会 議)

第9条 センターに、金沢大学人間社会研究域附属古代文明・文化資源学研究センター運営会議（以下「運営会議」という。）及び金沢大学人間社会研究域附属古代文明・文化資源学研究センター会議（以下「センター会議」という。）を置く。

(運営会議)

第10条 運営会議は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) センター運営の基本方針に関する事項
- (2) センター長の選考に関する事項
- (3) センター教員等の選考に関する事項
- (4) センターの予算及び概算要求に関する事項
- (5) センターの決算に関する事項
- (6) センターの将来計画に関する事項
- (7) センターの中期目標、中期計画及び年度計画の策定並びに中期目標に係る事業報告書の作成に関する事項
- (8) センターの中間評価及びセンターの改廃に関する事項
- (9) その他人間社会研究域長（以下「研究域長」という。）が必要と認める事項

(運営会議の組織)

第11条 運営会議は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 研究域長
- (2) 人間社会環境研究科長
- (3) 人間社会研究域の系長のうちから研究域長が指名する者
- (4) センター長
- (5) センター教員 若干人
- (6) 研究域長が必要と認めた者

(運営会議の議長)

第12条 運営会議に議長を置き、研究域長をもって充てる。

- 2 議長は、運営会議を主宰する。



- 3 議長に事故があるときは、議長があらかじめ指名する委員が、その職務を行う。

(運営会議の議決)

第13条 運営会議は、委員の過半数が出席しなければ会議を開き、議決することができない。

- 2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(委員以外の者の運営会議への出席)

第14条 運営会議は、必要があると認めるときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

(センター会議)

第15条 センター会議は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) センターの活動に関する事項
- (2) その他センター長が必要と認める事項

(センター会議の組織)

第16条 センター会議は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) センター教員
- (3) センターの協力職員のうちからセンター長が指名し、センター会議が認めた者

(センター会議の議長)

第17条 センター会議に議長を置き、センター長をもって充てる。

- 2 議長は、センター会議を主宰する。
- 3 議長に事故があるときは、議長があらかじめ指名する委員が、その職務を行う。

(センター会議の議決)

第18条 センター会議は、委員の過半数が出席しなければ会議を開き、議決することができない。

- 2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(委員以外の者のセンター会議への出席)

第19条 センター会議は、必要があると認めるときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

(中間評価及び設置期限)

第20条 センターは、設置の日から起算して3年目、5年目及び7年目に組織及び運営の状況並びに研究の状況について、自ら点検及び評価（以下「中間評価」という。）を行うものとする。

- 2 前項に定めるもののほか、中間評価及び最終評価に関し必要な事項は、別に定める。
- 3 センターの設置期間は10年とし、9年目に最終評価を行うものとする。

(運営に関する重要な事項)

第21条 研究域長は、センターの運営に関する重要な事項について、人間社会系教育研究会議の承認を得なければならない。

(雑 則)

第22条 この規程に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、運営会議又はセンター会議が別に定める。

附 則

- 1 この規程は、令和3年4月1日から施行する。
- 2 この規程は、施行の日から起算して10年を経過した日にその効力を失う。ただし、人間社会系教育研究会議が必要と認める場合は、同日以降もなおその効力を有する。





金沢大学 人間社会研究域附属
古代文明・文化資源学研究センター

〒920-1192 金沢市角間町
<https://csac-cr.w3.kanazawa-u.ac.jp/index.html>

© Center for the Study of Ancient Civilizations and
Cultural Resources, Kanazawa University

写真提供：国際文化財株式会社

